

テナガコガネ属 (*Cheirotonus* 属) に関する情報

原産地と分布： テナガコガネ属 *Cheirotonus* 属は9種あり、東南アジアを中心に分布する。日本にはバリーテナガコガネ *C. parryi* (タイ北部、ミャンマー、ラオス、ネパール等)、ヤンソンテナガコガネ *C. jansoni* (中国南部、ベトナム北部)、マレーテナガコガネ *C. peracans*(マレーシア) 等が輸入され、流通・飼育されている。

定着実績： 日本における侵入・定着実績はない。

評価の理由

日本にまだ定着していないが、侵入して定着すれば、生息場所である樹洞や餌となる腐植質をめぐる競合により、在来種で絶滅のおそれのあるヤンバルテナガコガネを絶滅させるおそれがある。また、遺伝的攪乱の可能性も懸念される。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 沖縄島北部にのみ産する同属のヤンバルテナガコガネ(国内希少野生動物種)の生息地に侵入した場合、競合や交雑が懸念される。

被害をもたらす要因

(1)生物学的要因

- 本属の種の幼虫は在来のヤンバルテナガコガネ同様に、年月を経た良好な林の大木に形成された樹洞に生息する。そのような環境はもとも少ない上、近年ますます減少している。そのような中、同属の外国産種がヤンバルテナガコガネの生息地に侵入すれば、競合する可能性が非常に高い。
- またヤンバルテナガコガネと系統的に近い種では交雑する可能性も考えられる。

(2)社会的要因

- この数年生体が輸入され、流通・飼育がなされている。主にインターネットなどで取引されている。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- コガネムシ上科の他の亜科からは大型で、前脚が非常に発達する(特にオスで顕著)ことと前胸後角が大きくえぐれるなどの特徴で識別する。
- 幼虫やメスの同定は、他のコガネムシ上科昆虫との間で困難な場合がある。

その他の関連情報

- タイワンテナガコガネ *C. formosanus* は現地での野生生物保育法によって、輸出が規制されているにもかかわらず、日本国内で流通飼育が行われている。
- その他の種の原因国でも乱獲が懸念される。

主な参考文献

- (1) 水沼哲郎 (1984) ヤンバルテナガコガネ. 104pp. 朝日出版社 森林科学, 38: 21-32.
- (2) Young, R. M. (1989) Eurichinae (Coleoptera: Scabaeidae) of the world: distribution and taxonomy. *Coleopt. Bull.*, 43:205-236.

アシナガキアリ (*Anoplolepis glaciipes*) に関する情報

原産地と分布： 明確な原産地は不明、アフリカもしくは熱帯アジア起源とされているが、アフリカ起源の可能性が高い。現在は世界中の熱帯・亜熱帯と北米に広く分布している。

定着実績： 日本では奄美以南の南西諸島と火山列島に定着している。近年名古屋の温室内でも確認されている。

評価の理由

海外では高い採餌能力と攻撃性による他種のアリとの競合・駆逐、捕食等による他の動物への影響が知られている。日本でもすでに南西諸島に定着しており、在来の無脊椎動物に捕食や競合により大きな影響を及ぼすおそれがある。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 捕食による直接的な影響で在来の無脊椎動物に深刻な影響を及ぼす他、鳥の営巣やトカゲ等の爬虫類、ジネズミの生息に影響を与えている例が知られている。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 昼夜を問わず活動するため、採食能力が高い。
- 働きアリの攻撃能力が高く、他種のアリを排除し、競合する。
- 化学防御物質を利用しコロニーを保護するため、天敵や他種のアリからの防衛能力が高い。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- アジアには同属の他種は生息していない。発達した複眼と脚を持つ。触角柄節は長く、頭部後縁をはるかに越える。触角べん節はすべて幅より長さの方が長い。後胸は小さく退化して、中胸と明瞭に区別できない等の特徴で他のアリから区別できる。

その他の関連情報

- IUCN の侵略的外来種ワースト 100 にリストされている。

主な参考文献

(1) Holway, D. A., Lach, L., Suarez, A.V., Tsutsui, N. D., Case, T. J.(2002) The Causes and

Consequences of Ant Invasions. *Ann. Rev. Ecol. Syst.*, 33: 181-233.

(2) IUCN-ISSG. The Global Invasive Species Database (<http://www.issg.org/database/welcome/>)

コカミアリ (*Wasmannia auropunctata*) に関する情報

原産地と分布： 南米原産。中米からフロリダ以南にかけてやアフリカ、ガラパゴス、ニューカレドニアなど太平洋諸島に侵入している。

定着実績： 日本への侵入・定着の例はない。

評価の理由

高い採餌能力と攻撃性による他種のアリとの競合・駆逐、捕食等による他の動物への影響が海外で知られており、日本に侵入すれば生態系に大きな被害をもたらすおそれがある。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 捕食による直接的な影響で在来の無脊椎動物に深刻な影響を及ぼす。
- 在来のアリ類を駆逐する例がある。
- ニューカレドニアでは爬虫類の個体群を減少させている例がある。

人の生命・身体に係る被害

- 刺されると激しい痛みを感じ、農作業等に大きな被害を与えている地域がある。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 多女王性であるため 1 コロニーあたりの産卵量も多く、物資に伴う分散にも女王が伴うことが多いため、コロニーの増殖や分布拡大の能力が高い。
- 昼夜を問わず活動するため、採食能力が高い。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 日本には同属の近縁種は生息しない。フタフシアリ亜科に所属し、腹柄節第 1 節が四角型に突出するのが顕著な特徴。
- IUCN の侵略的外来種ワースト 100 にリストされている。

主な参考文献

- (1) Holway, D. A., Lach, L., Suarez, A.V., Tsutsui, N. D., Case, T. J.(2002) The Causes and Consequences of Ant Invasions. *Ann. Rev. Ecol. Syst.*, 33: 181-233.
- (2) IUCN-ISSG. The Global Invasive Species Database (<http://www.issg.org/database/welcome/>)

ツヤオオズアリ (*Pheidole megacephala*) に関する情報

原産地と分布： 南アフリカ原産と考えられている。現在はアルゼンチンからフロリダにかけてやニューカレドニアやガラパゴスなどの太平洋諸島に侵入している。

定着実績： 日本では奄美以南の南西諸島に定着している。近年小笠原父島でも確認された。

評価の理由

高い採餌能力と攻撃性による他種のアリとの競合・駆逐、捕食等による他の動物への影響が海外で知られている。日本でもすでに南西諸島に定着しており、在来の無脊椎動物に捕食や競合により大きな影響を及ぼすおそれがある。

被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 捕食による直接的な影響で在来の無脊椎動物に深刻な影響を及ぼす。

被害をもたらす要因

生物学的要因

- 昼夜を問わず活動するため、採食能力が高い。
- 兵アリを生産し、攻撃能力が高く、他種のアリを排除し、競合する。
- 大きなコロニーを形成し、しかも活発に活動するため、そのコロニーが生態系に与える影響は大きい。
- 攪乱された環境下のみならず、自然林内にも入りこみ優占種になることがある。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- オオズアリ属(*Pheidole*)は他に8種が日本に生息する。この属には働きアリに顕著な二型があり、大型のものを兵アリ、小型のものを働きアリと呼んでいる。本種は兵アリの頭部後方表面に彫刻がなく滑らかで光沢がある点、働きアリの頭部後縁は丸く前中胸背板が融合して単一の隆起を形成する点で日本産の他種と区別できる。

その他の関連情報

- IUCN の侵略的外来種ワースト 100 にリストされている。

主な参考文献

(1) Holway, D. A., Lach, L., Suarez, A.V., Tsutsui, N. D., Case, T. J.(2002) The Causes and

Consequences of Ant Invasions. *Ann. Rev. Ecol. Syst.*, 33: 181-233.

(2) IUCN-ISSG. The Global Invasive Species Database (<http://www.issg.org/database/welcome/>)